

東京農業大学 拓友会ニュース

第31号・2015年発行

発行所 **東京農業大学拓友会**

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1

TEL.03-5477-2404 FAX.03-5477-4032

e-mail : takuyu@nodai.ac.jp

<http://www.nodai.ac.jp/int/original/about/index.html>

第57期総会および懇親会のご案内

第57期の拓友会総会および懇親会を次のとおり開催致します。

今年度も収穫祭期間中に開催します。数々の特別イベントも計画されていますので、万障お繰り合わせの上、多数ご出席下さいますようご案内申し上げます。

なお、平成27年の収穫祭は10月30日(金)より11月1日(日)に開催されます。

- 総会**
1. 日時 平成27年10月31日(土) 午前11時より12時まで
 2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科 共通利用室
- 懇親会**
1. 日時 平成27年10月31日(土) 正午より
 2. 場所 2号館3階 国際農業開発学科 共通利用室
 3. 会費 4千円(配偶者、子供の同伴歓迎致します。配偶者および子供は、一人につき2千円)

どうぞ皆様お越し下さい。なお、懇親会の方の参加も歓迎します。お問い合わせはこちらに連絡をお願いします。

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学国際農業開発学科 志和地 弘信
Fax : 03-5477-4032 E-mail : h1shiwac@nodai.ac.jp

創立125周年にむけての寄付金のお願い

東京農業大学は、明治24(1891)年、徳川育英会の育英農科として創設されました。平成28年に創立125周年を迎えるにあたり記念事業を実施することになりました。今後、本学が国際的な教育機関としての機能を一層高め、世界の農学の拠点大学として飛躍することを目指し、「東京農業大学国際センター」を建設いたします。これらの事業遂行のためには、14億円の資金を予定していますが、その内の一部を皆さまからの募金を仰ぐ計画としております。各界で活躍されておられる校友各位、在学生の保護者、本学の発展に深いご理解を頂いている方々、ならびに教職員の皆様には、何卒本事業の趣旨にご賛同頂き、格別のご支援、ご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

お問合せ先 〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学125周年記念事業募金係
電話 03-5477-2776・Fax 03-5477-2608 E-mail:bokin125@nodai.ac.jp

東京農業大学と青年海外協力隊の関わり



大塚 正明(昭和49年卒)

農業拓殖学科を前身とする国際農業開発学科は60周年を迎えるが、本学科から多くの参加者を輩出した青年海外協力隊も今年50周年となる。また同時に、今年中には農大出身の協力隊員が累計1000人を超すことが確実であり、この歴史的な節目に「東京農業大学と青年海外協力隊の関わり」について過去と現在を検証し、古きをたずねて新しきを知るための一助としたい。

1 青年海外協力隊の現状

1965年(昭和40年)1次隊として7名の農大卒業生を含む26名の青年がラオス、カンボジア、マレーシア、フィピンへ派遣され、以来88カ国と派遣取極めを交換し、派遣人数は40,270人に上る(2015年5月末現在)。現時点では71カ国に1974人が派遣されているが、近年女性の参加者が増え、現役隊員の約60%を占めている。かつてはアジア地域への派遣が多かったものの、最近ではアフリカ地域への派遣国数・人数が格段に増加し全体の30%を超える実績となっている。派遣国数の増加とともに途上国からの隊員要請数は増えているが、2003年度以降応募者の数は著しい下降傾向にある。農業分野は開発途上国からの協力隊派遣要請は依然と変わらない傾向が続いているものの、応募者の減少は特に顕著である。作物栽培などの実務経験が乏しい応募者には技術補完研修制度で手厚く対応しているが、必要な人材の確保に至っていないのが現状である。

2 青年海外協力隊創設における東京農業大学の関わり

国際協力は、1945年に始まったアメリカによる欧州復興計画(マーシャルプラン)が最初だといわれている。日本も1953年から世界銀行による融資を受け、戦後復興の基盤となる黒四ダム、東海道新幹線、東名高速道路などの建設を成功させたことは、被援助国としての貴重な経験となっている。戦争賠償としての経済協力が被援助国であるとともに援助国としての体制を早めた要因であるものの、1954年にコロンボプランに参加し、その数年後には海外からの研修員の受け入れや円借款を開始した。1962年には海外技術協力事業団が設立され、翌63年には海外移住事業団も設立され、本格的な国際協力が始動した時期でもあった。

しかし、第二次大戦終戦から1950年代における時代背景には特に農村部における次男三男対策が重要な政策の一つとなっており、事実1960年代には学生運動や青少年犯罪の増加などが社会問題化し、当時の池田首相は1962年の国会で「青少年の育成政策」をうたっている。日本の青年を海外に派遣し、途上国の国造りに貢献させるとともに、国際的視野を涵養せしめる構想は、全国において青年団運動を推進する団体を中心に1957年ごろからその気運が高まっていた。政界においても自民党青年局が日本青年派遣計画をまとめるなど、アメリカのケネディ大統領が創設したPeace Corps(平和部隊)より先に同様な構想が我が国においても提唱されていた。現実としてアメリカの平和部隊が1960年に創設されたことが政界や外務省の予算獲得などの具体的な動きにつながったことは事実であるものの、日本の青年育成に主眼を置いた「日本青年海外奉仕隊」構想にまとめたのは、青年運動の全国組織と東京農大、拓殖大学、日本大学などの、大学関係者である。そして、大学関係者は日本の青年が海外で貴重な経験を得ることにより、帰国後我が国の地域のオピニオンリーダーとして地域の発展に

貢献しうるものとして期待していた。まさに大学教育の延長線上の人材育成として青年海外協力隊事業をとらえていたのである。

特に、東京農大では協力隊創設のための政府海外調査団に参加するなど、協力隊創設に大きく貢献している。協力隊創設後は農業分科会委員を選出し、農業分野における技術的な支援体制に協力してきた。以来今日まで農業分野での技術的支援は継続されている。また、協力隊に参加させることも非常に熱心であり、大学内に協力隊応募選考委員会を設置して、実力の伴った人材を送り込むため学生時代から準備させるなど、他の大学にはない積極的な協力隊との関わりが、「1000人の卒業生の参加」という実績につながっている。これは農業拓殖学科開設当時から移住事業に関わりをもち、また大学独自でネパールなどの農業開発プロジェクトを実施するなど、国際協力の実践学を教員と学生が一体となって推進してきた学風によるものと、私は卒業生の一人として非常に誇りに感じている。

3 今後の青年海外協力隊と東京農業大学に期待すること

まず、特にアフリカは土地生産性が非常に低く、農業開発による貧困からの脱却が喫緊の課題であることを我々は再認識すべきである。約60%もの人間が農業に従事しているにも関わらず食糧が自給できていない。アフリカの農村は小規模農家で成り立っており、小規模農業による多様化された営農技術などは日本が得意とするところである。アフリカにおける緑の革命として期待されている「ネリカ米」の普及にも近年多くの青年海外協力隊員が関わっている。しかし、まだまだ農業開発に関わる人材が不足していることを、まず農大生に理解してほしい。

青年海外協力隊への参加は原則2年間であり、自分の人生の基盤づくりとしてとらえるべきであろう。協力隊の経験を活かし、社会に貢献できる人材として成せることは限りなく存在している。それは国際協力の分野だけではなく、日本国内の地域創生に関わることも大きな意義と可能性がある。政府が推奨する地域おこし協力隊など、海外での活動体験が大いに生かせる制度もある。地方で就農して地域の活性化に貢献している協力隊参加の東京農大卒業生も多にいる。

この、海外活動と国内貢献の一体化こそ、青年海外協力隊事業が50年前に創設された時、東京農大が中心となって描いた構想ではなかっただろうか。現在、国内外双方のニーズが明白になっている。必要なのはその双方のニーズを繋ぎ合わせる「人材育成」の拠点機能である。今後、青年海外協力隊が国際協力の経験をいかに国内貢献につなげることができるか、その構想に東京農大が再度中心的な役割をいかに担うことができるか、新たな挑戦が今求められている。

若手卒業生の活動 コーヒーの栽培技術者を目指して

国際農業開発学科 42期生 田代 司

コーヒーの木に携わるようになり、10年以上の月日が経ちました。現在、3人の子供の母・よき妻(?!)・そして、コーヒーの栽培技術者を目指す女性として、3つの顔を持ち、日々、奮闘しています。

「農業は楽しい!」私は心からそう思っています。人と人との繋がり・人と作物や自然との繋がり・農作物と社会との繋がり、そのすべての呼吸を合わせるために、大地で五感を研ぎ澄ませ、そして最善のタイミングを見極められた時、何にも代えられない喜びを感じるからです。

そんな私は、埼玉の住宅街育ち。ごく普通のサラリーマンの家で何不自由なく育ちました。幼いころ父の転勤で福島に移り、生産者の家にある見たこともない道具や機械、生産者の生活リズムに興味を持ち始めました。気が付いたら小学校の裏山で、担任の先生から野菜の栽培方法を教えてもらっている程、のめり込んでいたのです。これが、農業と私の出会いです。数年後、開発途上国で農業技術者として働きたいと夢を持ち、国際農業開発学科に入学しました。

私がコーヒーの木と深く関わるようになったのは、青年海外協力隊員としてドミニカ共和国の「小農家の所得向上のための環境保全型農業開発プロジェクト」に参加したことが始まりです。その後、直木賞作家の邱永漢氏に出逢い、邱氏が所有する中国雲南省保山の35haのコーヒー農園の管理を始めました。

「中国でコーヒー栽培?」と、よく驚かれます。雲南コーヒーは、コーヒーが苦手な方でも飲みやすく、口にするると爽やかな香りにマイルドな甘み・酸味が広がります。プーアル茶や雲南の少数民族が思い浮かぶエキゾチックなコーヒーです。

私が働き始めた2008年の時点で、雲南は、コーヒー業界の中で最後の開拓地と言われていました。しかし、産地では栽培や加工技術が確立されておらず、15年以上一度も剪定されていない農園や「儲かると聞いて植

てみたものの・・・。」という生産者が多く、人も木も疲れ切っている状態だったのです。まずは、管理する35haの農園を徹底的に調査し、土壌や栽培状態を見て区分けすることから始まりました。土壌改良・苗づくり・木や地形に合った剪定方法・肥培管理・収穫管理と、試験を繰り返しながら地域にあった方法を探りました。同時にジャマイカでコーヒー農園を管理されているOBを訪問させていただき、一時帰国時には、ブラジルに移住されコーヒー栽培に携わられていたOBにお話を伺いながら、技術を確立していきました。そして、買い付けができそうな、やる気のある生産者を見つけ出せば、考え出した方法をできるところから取り入れてもらいました。その日々は、「努力」「工夫」「忍耐」そのものでした。その後は、別のエリアに大手コーヒー会社の契約農園ができ、いろいろな国からの技術者が入ったことがきっかけで、現在、雲南省ではコーヒーはタバコに次ぐ輸出農作物になっています。

日本にいるとコーヒーは、焙煎豆やカップに注がれるコーヒーの「茶色」のイメージが強いです。コーヒーベルト(北緯25度以内)の生産地で育ったコーヒーは、たくさんの技術者の愛情を受けてコーヒーの色を変えていきます。

まずは、収穫色を統一し、一粒ずつ収穫される真っ赤に熟した「赤いコーヒーの実」。そして、赤い実の中につまった美味しさを引き出すために、収穫後24時間以内に皮をむき、発酵させてぬめりを取り除いた「白いコーヒー豆」=白い殻のついたコーヒー(粗殻のついたお米と同じ状態)。白いコーヒー豆の熟成後、殻をむいて軽く磨くと、中から「緑色のコーヒー豆」が顔を出します。熟成が上手くいった緑色のコーヒー豆は、宝石のような輝きを持っています。そして、手選別により形が悪い豆や味に影響する豆が取り除かれると、海を渡り、いよいよ消費地の焙煎場へ運ばれていくのです。焙煎技術者により緑色のコーヒー豆は15分から20分かけてじっくり焙煎されて、「茶色い焙煎豆」に変身します。最後に、バリスタにより、カップに注がれると「香り高い

住まい作りのトータルプランナー

宅地建物取引業 千葉県知事免許(10)第6298号



南房商事株式会社

代表取締役 藤井 勝政(拓殖1期)

〒297-0029 千葉県茂原市高師57番地
電話 0475(23)3251(代表)



地域一番の品揃え

花と緑

契約農家直送、だからいつでも新鮮!!

テーブルガーデンセンター

TEL 045-935-4187(代)

〒226-0023 横浜市緑区小山町 611-3

代表取締役社長 篠原 敬一(拓殖20期)

コーヒー」へと変化していくのです。

一粒のお米の種から収穫までに、八十八の農作業があるので、八十八を縦に書いて「米」という漢字になったと、一説では言われています。それと同じように、一杯のコーヒーには、たくさんの技術者たちの工夫と努力の物語が詰まっています。奥の深い究極の嗜好品なのです。

ここ数年、コンビニでも、手軽に淹れたてのコーヒーが飲めるようになり、今やコーヒーは、私たち日本人にとって、欠かせないものになりました。今度、コーヒーを

飲まれる時、是非、産地やコーヒーに携わる人たちの想いを、想像してみられてはいかがでしょうか。

最後になりましたが、農業の現場を勉強するために国内外で農業研修や視察を受け入れてくださった先輩方々、卒業生の方々、卒業時に背中を押してくれた同期に感謝申し上げます。コーヒーの栽培技術者として貢献できるよう日々努力していきたいと考えています。



国際農業開発学科の動静

2014年度の本学科(杉原たまえ学科長、真田篤史主事)の動静は以下の通りである。

2014年		9月	18日 編入学試験 19日 後学期授業開始 19日～20日 第14回世界学生サミット 「食料、農業、環境分野における、発展と地域の伝統を守るための学生の活動」をタイ国カセサート大学において開催
3月	20日 2013年度卒業式(卒業生151名)	10月	9日～15日 農業開発実習 (第3班、東京農大宮古亜熱帯農場にて、学生34名、引率:板垣啓四郎教授)
4月	2日 2014年度入学式(入学者161名) 5日～6日 新入生学外オリエンテーション (神奈川県立足柄ふれあいの村) 8日 前学期授業開始 9日～15日 農業開発実習 (第1班、東京農大宮古亜熱帯農場にて、学生42名、引率:足達太郎教授)		31日～11月2日 収穫祭
6月	5日～11日 農業開発実習 (第2班、東京農大宮古亜熱帯農場にて、学生42名、引率:小塩海平准教授) 7日 教育懇談会 21日 ホームカミングデー	11月	3日 体育祭 1日 拓友会第56期総会、懇親会
7月	12日～13日 地方教育懇談会 27日 高校生向けワークショップ 「ひらめきときめきサイエンス ーようこそ大学の研究室へ」 28日～8月1日 前学期定期試験	12月	24日～1月2日 冬季休業
8月	3日～4日 キャンパス見学会 4日～9月18日 夏季休業	2015年	
9月	1日～4日 農業総合実習(1年生、伊勢原農場にて)	1月	5日 後期授業再開 26日～30日 後学期定期試験 30日 卒業論文提出締め切り
		2月	1日～7日 農業開発実習 (第4班、東京農大宮古亜熱帯農場にて、学生48名、引率:パチャキルバビル助教) 16日 優秀卒業論文発表会
		3月	20日 卒業式

東京農業大学拓友会賞

トゲイモ(*D.esculenta*)の生育における窒素施用の影響と窒素固定能の推定熱帯作物学研究室 杉山 薫
指導教員 志和地 弘信

ヤムイモの消費が拡大している西アフリカなどではヤムイモの生産量を増やすために、これまでの休閒農法から輪作への転換が迫られている。そのためには施肥技術の確立が必要であるが、施肥がヤムイモの生産性に及ぼす効果は、施肥の割合に比例して塊茎重やデンプン量が増えるとする一方で、効果がないという報告もあり、解釈の分かれる研究成果が世界のヤムイモ研究者を悩ませるタネとなっている。熱帯作物学研究室におけるこれまでの研究でも先行研究と同じような結果が示されてきたが、2年前に窒素を与えなくてもある程度育つダイジョ品種が見いだされ、この品種は窒素固定能力のある微生物と共生していることが確認された(未発表)。この共生による窒素の供給がヤムイモの施肥に関する研究を難しくしている一因と考えられた。そこで本研究では、こういった例がダイジョに限られたものか、ヤムイモの一種であるトゲイモについても生育に及ぼす窒素施用および窒素固定能の可否の推定を試みた。

杉山さんは2年生から熱帯作物学研究室の室員としても活動してきた学生である。3年生の時には4年生の卒論研究を手伝いながら、研究および分析手法を習得してきた。本実験を遂行するためには植物体の厳格な管理と土壌や植物体の分析技術の習得が不可欠であり、杉山さんは困難で地道な作業をよく完遂したと思う。

緒言に続く本論では、まず実験手法について詳しく述べている。本研究ではトゲイモが植物体に取り込む窒素を調べることから、まず始めに、実験に用いる土壌および水道水に含まれる窒素を詳しく調べる必要があった。そ

のため、実験に及ぼす影響の少ない環境を作り出すのに苦労した。 $\delta^{15}\text{N}$ 窒素同位体の測定は本学に安定同位体比質量分析計がなかったことから外部委託をしたものの、その他の一般物質は独自に測定した。

実験の結果、供試したトゲイモ品種は無施肥の条件でもある程度生育することが確かめられたが、トゲイモの生育は窒素施用によって促進され、無施肥の対照区に比べて有意に大きくなった。窒素を施用することによりSPAD値も大きくなったことから、窒素施用はトゲイモの生育に良好な効果があったと推察される。次に、植物体の窒素がどこから供給されているのかを調べるために、土壌、種イモ、植物体、窒素肥料中の $\delta^{15}\text{N}$ 窒素同位体を測定した。その結果、施肥区の植物体は尿素肥料から窒素を取り込んでいることが明らかになった。一方、対照区の植物体の $\delta^{15}\text{N}$ 値は土壌以外からの窒素を吸収した可能性が考えられるが、空気中の $\delta^{15}\text{N}$ 値と比べて大きいことから空気中の窒素を固定したか、この実験では不明であった。しかし、比較植物として実験に用いたカボチャが対照の土壌でほとんど生育できなかったのに比べて、土壌中にほとんど窒素がない条件で180日目まである程度生育したトゲイモは何らかの方法で窒素の獲得が不可欠であり、トゲイモが窒素固定をする微生物と共生していないとは言い切れない。窒素固定をする微生物(共生菌)はヤムイモの種や品種によってその能力が異なることも考えられ、本研究の結果はダイジョの共生菌に次いで、新しい知見となる可能性がある。

杉山さんは熱帯作物学研究室のゼミ幹事をつとめ、その熱意と努力は先輩・後輩からの信頼も厚く、また後輩の指導にも一生懸命だった。卒業後は青年海外協力隊に参加することをめざしている。この卒論研究に取り組んだ経験はきっと青年海外協力隊の活動にも生かされると思う。

農業分野におけるホームレスの中間的就労に対する取り組み

農業開発政策研究室 吉田 紗子
指導教員 杉原 たまえ
岩本 純明

1. 論文の背景と問題意識:

近年、農林水産行政は、農業従事者不足問題を背景として、多様な担い手を農業分野へと動員する取り組みを推し進めている。現在、この「新たな多様な担い手」の中心となっているのが、障がい者や高齢者などである。加えて、まだごくわずかながら、ホームレスやニートなど社会

的に排除された人々を農業分野に包摂する試みが、国内でも始まりつつある。

日本国内には、約7千人を数えるホームレスが存在するとされている。彼らは就労による自立を達成することが困難で、一旦就労しても短期間のうちに路上生活に戻ってしまう。そうした現状について筆者は、就労先を特定している行政の就労支援の限界と、ホームレス自体が意欲面で就労以前の段階にあることを指摘する。前者の行政支援については、多くのホームレスが従事してきた警備・清掃・建設業などの特定業種への就労移行支援ばかりでなく、多分野での就労支援の必要性を説き、その一つとして農業分野の可能性を指摘している。後者について

は、就労による自立支援の前段階として、「中間的就労」の必要性をあげている。「中間的就労」とは、公益的な業種に従事することによる社会貢献の自覚や就労意欲の増進など、地域社会とのかかわりの中で自己回復をする過程であり、いわゆる「福祉的就労」と呼ばれ始めているものである。農業にこそ、この福祉的就労の機能があるのではないか、というのが筆者の仮説である。

2. 論文の構成:

本論文は、第1章で研究課題の設定および研究方法について述べ、第2章ではホームレスの就労支援に関する先行研究の整理をしている。第3章では、ホームレスの現況や行政支援について概観し、第4章で農業分野における中間的就労についての事例整理をおこなっている。事例研究として、農業分野におけるホームレス就労支援の先駆的事例である「NPO農スクール」と、NPO共働学舎を取り上げている。NPO農スクールは、農場に通いながら農業技術を習得したうえで、就農までを支援しようとするものである。一方、共働学舎は、社会的に困難を抱える人々が共同生活を行ないながら農業に従事するもので、自給的な農業を志向する信州農場と、本格的な商品生産をおこなう新得農場の3か所2タイプの取り組みを取り上げている。これらの事例を評価しつつ、まだ取り組みとしては、生産者および消費者間のネットワークが地域で構築されていない点が課題として存在することを指摘している。その課題が既に構築されている先駆的事例とし

て、フランスのジャルダン・コカーニュを取り上げている。第5章の結論部分では、課題整理をおこなっている。

3. 論文への評価:

本論文は、以下のような点で優れており、優秀論文として表彰するに値すると考える。

- ①新たな担い手として、社会的に困難な人々を包摂する試みはまだ始まって間もなく、研究蓄積も浅い。特に農業分野におけるホームレスの就労に関する先行研究はまだないといってよい。本論文では、新たな担い手としてよりも、本格的な就労に至る前の、中間的就労として農業の可能性を模索している。農林水産省でも、「農福医連携」という新たな農業の在り方を模索し始めており、先駆的な研究といえる。
- ②1年にわたるNPO農スクールでのインターンを通じ、研究課題に関して参与観察をおこなっている。また、本スクール出身者(元ホームレス)の就農先(熊本の農家)まで現地調査を行っている点、NPO共働学舎3か所で実習やヒアリングを行なっている点など、地道にデータを収集している点は高く評価できる。
- ③国内の農業分野での中間的就労のありかたを研究する中で、途上国のホームレス問題に対してどのような課題を抽出できるか、という問題意識から本課題が設定されている。まだレッスンを引き出すというところには到達していないが、課題への問題意識は本学科の卒業論文研究として相応しい。

拓友会賞を受賞して

農業開発政策研究室 吉田 紗子



この度は、拓友会賞をいただきありがとうございました。論文作成にあたり、先生方、同期・後輩にたくさん支えていただきました。1年次の終わりから、研究室に入り、言葉では簡単になってしまいましたが、「農業のもつ多面的な機能」を活用して「社会問題を解決

すること」を自分の研究テーマにおき、勉強してまいりました。3年次には収穫祭文化学術展において「ホームレスと農業」を取り上げ、研究発表を行ないました。4年次には引き続き「ホームレスと農業」を掘り下げて勉強するため、ホームレスやニートのために農業体験プログラムを提供しているNPOでインターンをしました。研究としての視点、仕事としての視点の両面から研究を行ない、論文に生かすことができました。近い将来、自分でも社会的問題を解決できる農業経営をしたいと考えています。

現在は卒業し、4月からは1年間の任期で、「緑のふるさと協力隊」として、広島県北広島町で地域おこしのお

 Welcome to TomaTown 加藤耕房GROUP UNI-HEARBEST LTD. e-mail: honsh@e21038.jp ユニ・ハーベスト株式会社 www.e21038.jp 一級建築士事務所: 埼玉県知事(2)第9686号 宅地建物取引業: 埼玉県知事(2)第20791号 有限会社テラ・アクア総合研究センター 株式会社ビューティー・ジュエル 加藤耕房有限会社 無料法律相談室/相続対策室 総合本社: 川口市南鳩ヶ谷4-17-5TK加藤ビルフレイジ1F TEL 048-288-0848/FAX 048-288-0868	TOKYO fresh 外国人向け賃貸仲介 マンスリー・セットアップ住宅 www.stayfresh.tokyo 親子・スカイプ教室 英会話/ビジネス翻訳サービス www.japanzaa.com JapanZ ASPIRE ACADEMY TomaTown Design Lab. 印章・印刷・レーザー加工 判子屋 T-time 弊社撮影協力のNHKドラマ「徒歩7分」 昨年度向田邦子賞を受賞しました 1918-T型フォード 1926-T型フォード 1930-A型フォード 1948-MG-TC レンタル 8月放送NHK「高橋是清」主演オダギリジョー 弊社出演者: A型・T型フォード、加藤CEO、サムM	主なスタッフ ANZCCJ member CEO. 加藤耕誠 拓殖30期 CFO. 加藤深雪 拓殖31期 外国人サービス事業部 Manager 社長室長 Sam Stapley ASA(オーストラリア公認会計士) 渉外 (非常勤) 加藤拓洋 開発54期 海外のお客様にはネイティブ社員の他 教室、不動産やデザインの各セクション に現役東大、早慶、ICU、拓大などの 英語対応ができるバイリンガルスタッフ やネイティブが多数いるので安心です またNHKドラマをはじめとして劇場車 イベント車のレンタル(ドライバー付)や 劇用住宅の貸出も行ってあります
--	---	--

手伝いをしています。広島県は瀬戸内海に面していて、夏はとても暑いイメージですが、北広島町は、冷涼な気候で、私の住む芸北地域内には、5カ所のスキー場があります。それほど冬は寒く雪深いところです。一番驚くのは、リンゴの栽培が可能なこと。地元の高校で栽培に成功し、今では芸北地域内で多く栽培されています。

芸北地域では、10年ぶりの協力隊の受け入れということで、行政の方と連携しながら、協力隊と地域とのつながりを一から作っている最中です。活動を進める上で支えてくださっている、地域コーディネーターの方は農大OBで、地域づくりのプロとして、多くのことを日々学ばせてもらっ

ています。私自身、田舎で生活するのは初めてで、新鮮で楽しいと思うことも、戸惑うことも多々ありますが、この1年が私にとって「田舎修業」の1年と捉えて有意義に活動できればいいなと思っています。

そして、地域の方と関係づくりをする中で、当たり前ではありますが、礼儀、言葉遣いなど気を付けなければならない場面が多くあり、農大での研究室生活・農業実習を通して学んだことが今に生かされているように思います。

これからの約半年の任期も、地域みなさんに支えられながら、活動を遂行していきたいと思っています。

女子トライアスロン競技で2020年東京オリンピック出場をめざす

国際食料情報学部国際農業開発学科3年 福岡 啓
湘南ベルマーレトライアスロンチーム所属

私は、3歳から水泳を始め、その後、本格的に練習に打ち込み全国大会に出場しましたが、高校時代、競泳人生最後と決めたレースでも自分の力を結果として出すことが出来ずに終わりました。この気持ちが今のトライアスロンを始める大きな一歩となりました。私は、小学生の頃から体力には自信があり、持久走は得意でした。高校で3キロ走を測ったときのことでしたが、中学生と高校生を合わせて2,100人もの女子校生の中で、2位となりました。いつしか、水泳だけでなく走ることも楽しいと思えるようになり、トライアスロンをやりたいと漠然と思っていました。

しかし、15年間やってきた水泳を辞め、違うスポーツ競技に移るということは、当時大学に入学したばかりの私にとって、学生のうちでしかできないことをいくつか断念することになり、思い切ってスポーツに力を注ぐことは自分にとって生易しい決断ではなかったのです。

そんな私がトライアスロンをやろうと決めた最後の決め手は、新しく始めたバイト先にありました。アルバイト先で、たまたまトライアスロンをしている大学生が6人もいました。トライアスロンをしている人はそう多くはないと思っていたのに関わらず、アルバイト先のほとんどの学生がしていたので不思議な縁を感じました。そして、私にはその先輩たちがとても輝いて見えました。大学の練習に誘わ

れたりし、遠い存在であると思っていた競技が、どんどん身近な存在になってきて自分でもできるのだと感じ、挑戦してみようという気持ちを固めました。大学生のうちでしかできないことはたくさんあります。しかし、体力がある若いうちに出来ることはもっと限られてくる、そう自分の人生を一通り考えたとき、今もう一度、今しか出来ないスポーツを始めて、悔いの残らない人生にするためにも今を燃焼しようと思いました。

そんな時に家の近くにある湘南ベルマーレというトライアスロンチームに出会い、選手として入れてもらえることになったのです。こうして大学2年からトライアスロンを始めることになり、これまで数回のレースに出場させていただきました。初めて6カ月の日本選手権では15位に入り、それから半年後のレースではU23アジア選手権の出場権を獲得することができました。この試合では、23歳以下の日本のトライアスリートのうち上位6人がアジア選の切符を獲得できることになっていました。そして、初めて日本代表として参加するU23アジア選手権では、準優勝という結果で得ることが出来ました。また、アジア選手権より一つ上のレベルであるU23世界選手権の切符を賭けた試合では2位となり、あと一歩で出場権を獲得できるところまで成長出来ました。正直、トライアスロンを始めたばかりの頃は自分でもここまでの成績を残せるなんて思っていませんでした。今こうして海外を含めた色々な選手と競い合えることを嬉しく思いますが、今の自分の目標である



株式会社 ムラカミ シード
MURAKAMI SEED CO.,LTD

本 社

〒309-1738 茨城県笠間市大田町341
TEL 0296-77-0354 (代) FAX 0296-77-1295
<http://www.murakami-seed.com>

ムラカミシード水戸研究農場

〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332 (代) FAX 029-259-6226

代表取締役会長 村上典男(拓殖23期)

ガーデンショップ花みどり本店

〒319-0323 茨城県水戸市鯉淵九ノ割5986
TEL 029-259-6332 FAX 029-259-6226

村上 登(拓殖26期)

村上忠義(拓殖29期)

東京オリンピックに出場するためにはまだ最初の一步の階段を登れたにすぎず、全能力が足りません。今後、いずれ世界の壁を思い知らされる時が来るでしょう。外人選手との大きな差は体格や体力であると思われていますが、それに負けないよう、スイミング、バイク、ランニング共に劣らないような馬力のあるパフォーマンスをするための基礎を5年後に向けてつくっていきたくと思っています。何もトライアスロンの知識がない私が2年でここまで来ることができたのは、たくさん方々の支えがあるからであって、自分一人ではここまで来ることが出来なかったと感じています。今の自分の素晴らしい環境を築いてくださった周囲の方々の支えに感謝し、まだまだ精一杯頑張ろうと思っています。

まず、今年の秋に開催される日本選手権では8位以内でゴールし、そして来年行われるユニバーシアードで世界

の学生相手に劣らないレースをしていきたいと思っています。農大生として、大根のような図太く根強い走りをしますので、応援の程よろしくお願い致します！



8月30日に開催された2015日本学生トライアスロン選手権観音寺大会(香川県)において福岡さんが見事優勝した。

国際農業開発学科在学生の活躍

農友会ホッケー部 青山 力也君(開発1年) 21歳以下男子ホッケー日本代表マレーシア遠征メンバーに選出。
農友会 少林寺拳法部 第52回関東学生少林寺拳法大会 演武 男女茶帯 4位 坪田 歩(開発2年)
本選出場演武女子二段以上の部 眞保 都(開発3年)

東京農大での45年間を振り返って

高橋 久光

昭和43年4月、東京農業大学の門をくぐったのは桜の美しい季節であった。それから、47年の歳月が過ぎ今日を迎えた。奄美大島から東京までは、奄美と鹿児島までは船で一晩、鹿児島から東京までは急行電車で24時間の2泊3日の長旅であった。入学して間もないころ、友人に伊豆大島と勘違いされショックな思いをした。そんな遠くから農大に来るわけがないと思われたのである。

青年海外協力隊を志し、農大に入学したのであったが、卒業まじかになり今の自分では、途上国にいても何もできないのではと不安になり、研究室の先生(故大谷希六教授)に相談し、再度勉強のやり直しで、東京教育大学(現筑波大学)の大学院に進み研鑽を積むことにした。大学院修了前に農大に戻ってこないかと言われ、就職が

未定だったので、私はその誘いに甘えることにした。

人と人との出会いの不思議さを痛感した。就職先は農業拓殖学科(現国際農業開発学科)のある研究室の助手であった。そこで指導を受けた先生は伊東信吾教授(故人)であった。先生は植物生理学が専門であったため私も生理学を研究することになった。先生と相談の結果「トウモロコシの亜鉛欠乏に関する研究」に取り組むことになった。水耕栽培の実験のため水道水が使用できず純水を使用しなければならなかった。培養液は毎週取りかえる必要があり、純水を取るのが毎日の仕事になった。18リットルのポリタンクはうっかりしていると、すぐ満杯になり、溢れてしまい、下の研究室に漏水させしばしば迷惑をかけてしまった。我々の時代、多くの助手は自分の研究を学生と一緒に取り組んでいた。当時はそれがごく普通の事であった。その研究が纏まったのは1994年(平成6



株式会社メルカード東京農大

カムカムを主力とした
農大商品、農大OB商品を販売



〒156-8502
東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学11号館1階
TEL:03-5477-2250
FAX:03-5477-2251
Web: <http://ichiba-n.co.jp>

年)のことであり20年の歳月を要した。それを指導して下さったのが太田保夫教授であった。先生は、今までの私の実験結果を見て「高橋君もうそろそろ纏めなさい」と言って下さった。「実験は何時までやってもきりが無い、どこかで区切りをつけなさい」とアドバイスして下さった。それからしばらくして2人で1泊の旅に連れて行って下さった。それは論文のまとめ方についての旅であった。この事は、後の私の大学における「教育と研究」に大いに役立った。私にとって大谷先生は生みの親であり、太田先生は育ての親である。

太田先生が退職後は石原邦教授や岩堀修一教授をお迎えし、学生の指導をお願いした。両先生には研究に対する考え方について色々と教わった。

学位論文の取りまとめが終わった後は、私がやりたい研究テーマが提案された。それは農大が平成3年創立100周年を迎えたのを期に、私は「砂漠緑化へのチャレンジ」(代表者:故人塩倉高義教授)学術プロジェクトに参加した。フィールドは東アフリカのジブチ共和国であり、それまで名前も聞いた事のない国であった。

ジブチ共和国は、エチオピア、エリトリア、ソマリアに囲まれ、紅海とアデン湾の間に位置している。国土面積は2万3,000平方メートルで、四国の1.2倍の小国である。年間降雨量は約160ミリ、5月から9月の平均気温は約38℃、10月から4月は約25℃であり自然環境は農業にとっても非常に厳しい。このような自然条件下で何が出来るか。メンバーで色々と知恵を出しあった。

その結果これまでに東京農大がジブチにおいて施行試行してきた緑化工法は「ストーンマルチ工法」「コーティング種子播種工法」「植生機材吹き付け工法」「ウォーターハーベ・スティング工法」「ダブルサック工法」などである。「ストーンマルチ工法」は天水のみ、または少量灌水のみで、植物の生育を期待する緑化工法である。岩石砂漠地帯などに無数に転がっている1~2kgの石を1㎡あたり20~30個地表面に敷き詰め、石と石の間で植物を生育させる方法で、自然の生態系との調和を考慮した工法である。ストーンマルチ工法の効果としては、1) 土壌からの水分蒸発の抑制、2) 地温上昇の抑制、3) 土壌表面浸食の防止、4) 結露による空中からの水分補給、5) 稚苗の保護、6) 動物による食害軽減や植生復元力の保持などがあげられる。

「ダブルサック工法」はあらかじめ掘削した穴(直径15cm、深さは植物の生育可能な土壌水分が存在する深さ)円筒型の外筒と内筒の2つのサック(材料は生分解せいのビニールやクラフト紙)土壌中に埋没し、内筒側に植物の種子や苗木を植える工法である。外サックは、外部からの熱移動の抑制や地温環境の改善に役立つ。

私自身ジブチ共和国には30回以上出かけているが、正確な回数は定かでない。未知のことを成し遂げるにはたゆまぬ努力と決してあきらめない気持ちを持ち続ける事だと思っている。このプロジェクトは既に二十数年が過

ぎたが、いまだに続けられている。いつかジブチも緑豊かな国になる事を願ってやまない。

東京農業大学は1999年(平成11年)から10年間、ボゴール農科大学(インドネシア)、ウダヤナ大学(インドネシア)、ハノイ農業大学(ベトナム)、ラモリーナ農業大学(ペルー)と共同で「新農法確立のための生物農薬など新素材開発」(代表者:松田藤四郎教授:元学長・理事長)と題するプロジェクトをスタートさせた。本プロジェクトは化学合成資材に依存する近代農法に替わる農法の確立を目指している。そのためには、化学肥料や化学合成農薬を代替する新たな生産資材を開発し、それらを用いた生産技術体系が確立され、実際の生産現場へ普及されなければならない。本プロジェクトでは植物源農薬班、微生物班、天敵班および農法班の4つの研究班を組織し、それぞれの分野で共同研究を実施した。私は農法班のメンバーとして、インドネシア、ベトナム、ペルー、タイ、アメリカ、ネパールにおける有機農業の実態調査を行った。一方、大学の研究室では、現地調査の結果を踏まえ大学院生や学生達と有機質肥料の機能性について種々の野菜を用い、生育や収量・品質について化学肥料との比較実験を実施した。各野菜の収量や品質は有機質肥料が化学肥料に代替になることが明らかとなったが、病虫害の対策については、まだまだ取組む必要がある。地球上の天然資源は決して無限ではなく有限である事はだれしもが判っている。増え続ける世界の人口の食料をいかに確保することは農学を学ぶ人達の課題でもある。

平成2年3月に大学院国際農業開発学専攻(修士課程)が設置され、研究室は大学院生と学部生で構成され研究も幅広く行われるようになった。各学科に大学院が設置され、農大の研究も益々進んでいっている。私の研究室でも院生を中心に学会発表の数も増えた。まさに大学は「教育と研究」の場となった。

今後の熱帯園芸学研究所の運営は、弦間洋教授・小塩海平教授と真田篤史助教にお願いすることになる。熱帯園芸学研究所の伝統を継続しながら、さらなる発展を祈ってやまない。

さらに、東京農業大学が農学の総合大学として世界に羽ばたくことを心より祈ると同時に、国際農場開発学科が益々発展することを期待いたし挨拶いたします。



株式会社東京アグリビジネス

TOKYO AGRIBUSINESS CO., LTD.
緑地防除管理・請負メンテナンス・資材販売

代表取締役社長 野瀬 忠

(昭和52年 拓殖18期)

〒252-0302 神奈川県相模原市南区上鶴間2-7-7

TEL 042 (744) 6237

FAX 042 (744) 6295

新任教員紹介

研究室 弦間 洋



この4月より嘱託教授として国際農業開発学科にお世話になっております。専門分野は、果樹生産とその利用(収穫後生理)ですが、現在までにいろいろなアプローチから研究をして参りました。とくに近年は、地球温暖化に伴う

種々の果樹における生育不良、例えばブドウの着色不良要因の究明とその改善策、また、低温遭遇不足による不完全な休眠打破現象の生理的機構を解析することに取り組んできました。一方、本学科も深い関係にある、日本熱帯農業学会の運営にも参画して、学術活動の進展に微力ながら関わって参りました。本学着任前の大学でも多数の留学生を含めた大学院生・学生の農学教育に腐心してきましたので、国際農業開発学科での教育・研究活動は今まで培った経験で十分対応できていると思っておりました。ところが着任以降4か月が経過し、農大の全貌を目の当たりにし、また、活発な国際農業開発学科の実績と日々の躍進に触れることになり、この考えをリセットする必要が生じてきました。

すなわち、農大のアドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーを改めて認識し、実践すること

となりました。いみじくも学長が入学式での式辞で、「農大ファミリー」を標榜しておられましたが、まさに現役学生・院生への農学教育・研究指導はもとより、OBの皆様と連携しながら問題解決能力と国際性豊かな適応力を備え持った有為な人材育成が営々と進められていることを知りました。厳格な教育環境と明確な達成目標を提示しつつ、一方では文字通り家庭的な雰囲気や漂わせながらのポリシーが一貫しているのです。

私の職責である農業開発と国際協力に資する教育・研究について、農大ポリシーをもって実践すべく努力する所存です。その過程においては拓友会の皆様との連携は必須であると思っておりますので、衷心よりご協力をお願い申し上げます。ちなみに熱帯・亜熱帯果樹の生産制御技術の構築や、果実の保蔵を中心とした研究テーマを重点的に進めていくつもりですが、途上国においては生産基盤についての情報収集が重要ですし、我が国の関連産業として生産園の栽培ノウハウや蓄積された物流システムの知見などは応用可能な礎となりますので、重ねて多面的な分野・領域の情報についてご教示賜ればと存じます。

また、現在、途上国からのJICAボランティア派遣要請案件の充足率が不足気味ですので、是非、本学科で学ぶ学生諸君に青年海外協力隊への積極的な応募を奨励したいと思っております。

農業環境科学研究室 丸田 恵美子



2015年4月から国際農業開発学科・農業環境科学研究室に嘱託教授としてお世話になっております。農業環境科学研究室の先生方と学生の方々、学科の教職員の方々のおかげで、何とか前学期の授業や実習を終えることができ、ほっとしているところです。

着任以来、日々新しいことの連続で、それに慣れるのに一生懸命で、あっという間に前学期が終わってしまったという感想です。

新しい発見の第一は、大学の組織が非常にしっかりし

ていることです。明確な理念のもとに一貫した大学運営、教育・研究が進められていて感心させられております。それに基づいて、1年生から4年生までの教育が大変合理的に運営されていると思います。4月からの短い期間に、研究室の3年生、4年生がそれぞれに急速な成長を遂げる様子を目の当たりにしてきました。4年生は、研究室運営の全責任を負っているという責任感が強く、強いリーダーシップで3年生を引っ張ってきました。そのため、最初は頼りない一面もあった3年生の人たちも今では、随分しっかりして、これなら十分に4年生の跡を継げるな、というレベルまで成長してきたように見受けられます。

次に新しい経験としては、国際農業開発学科として、留学生が多く、留学生との交流が日常となったことです。ことに大学院の授業では半数が留学生でしたので、彼らが

観光庁長官登録旅行業第1835号 IATA(国際航空運送協会)公認代理店
(社)日本旅行業協会正会員 社団法人海外ツアーオペレーター協会正会員

ふれあいの旅を演出する (株)アルファインテル南米交流

代表取締役: 佐藤 貞茂(拓殖15期)
〒105-0004
東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階
電話: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540
ホームページ: www.alfainter.co.jp
メールアドレス: info@alfainter.co.jp
平日9:30~18:30 土曜日9:00~12:00
日・祝日は休み

IATA ALFAINTER

東京都知事登録旅行業第3-5792号

KIX

キックス・エアー・チケット
株式会社 キ ッ ク ス

代表取締役 塩満 仁

〒187-0003
東京都小平市花小金井南町2-17-2-603
Tel 042-458-1180 Fax 042-458-1180
携帯 090-1761-0970
E-mail shiimitu@bird.ocn.ne.jp
E-mail info@kix-j.co.jp

http://www.kixairticket.com

自国に戻ったときに少しでも役立つ授業をとの思いで授業の準備をし、大変勉強になりました。レポートを読んでも留学生たちの自国の農業の発展に尽くしたいという思いが伝わってきました。このような環境で学べる日本人の学生たちも、将来、社会人となったときに国際的な感覚が自然と身についているだろうと思います。

学生さんたちが大変礼儀正しく、また優しいので感謝しています。実習では、本当にお世話になりました。慣れないことが多く戸惑っていましたが、終始支えてくれました。これからは、学生さんたちに何をお返しするか、自分の人生経験の中から考えていきたいと思っています。

地域農業開発研究室 山田 隆一



2015年4月に着任しました山田隆一です。それまでは、国際農林水産業研究センターに所属し、ベトナム、ラオス、モザンビークの研究を行ってきました。具体的には、ベトナム・メコンデルタにおける農畜水複合生産システムの経営的評価、ラオス天水稲作地域における農業経営研究、モザンビークにおける天水畑作経営研究を実施してきました。いずれも技術研究(技術開発)との連携の中で農業経営研究を行ってきました。経営研究の中で技術の位置づけを明確にすることは大変重要なことであると考えます。それは、技術の普及・定着と密接に関わっているからです。このことは正に現場型研究であり、実用研究の典型的事例の1つであると考えられます。

また、これまで途上国の研究者と共同研究を行う中で、相互に足りないものを補い合うことの重要性を感じてきました。日本人研究者の専門性は途上国研究者にとって大きな刺激であったし、他方で途上国研究者の実用性重視の姿勢は日本人研究者にとって学ぶべきものでし

た。こうした教訓を今後の教育にも生かしていきたいと考えています。

今後、教育においては、これまでの経験を踏まえながら次のような点に留意していきたいと考えています。

第1に、現場主義の姿勢を示すことです。途上国の農業・農村と農家に関しての多くの知見は現場での調査や観察によって得られますので、その重要性和具体的な方法について事例を交えながら伝えていきたいと考えています。

第2に、実践主義の姿勢を示すことです。近年、学術性だけでなく、実用性を有する研究が求められていますので、開発や政策の方向性に十分な影響を及ぼしうる研究とは何かを伝えていきたいと思っています。

また、今後の研究においては、開発と連携した、あるいは一体となったような実践的研究を目指していきたいと考えています。具体的には、技術開発や社会開発の農家レベルにおける評価、およびそれと関連した農業経営構造の研究を行っていく所存です。

特に、近年、アジアにおいて農薬、化学肥料の多投による健康被害、水質悪化などが大きな問題となっています。こうしたことを踏まえ、今後、アジアにおける環境保全型農業のあり方を探していきたいと考えています。

農業開発政策研究室 飯森 文平



2015年4月より、国際農業開発学科農業開発政策研究室に助教として着任しました。2013年に国際農業開発学専攻博士後期課程を修了し、その後、東京農業大学特別研究員および非常勤講師を経て、本年より、再び国際農業開発学科で教員として働かせて

ていただくことになりました。

これから、新たに国際農業開発学科の教員として働いていくうえで、常に大切にしたいと考えているのは、「フィールドから学ぶ」という姿勢です。

私は、学生時代より、サモア独立国を中心に、オセアニア小島嶼国の村落社会について調査研究を行ってきました。これらの国々は、世界地図の上では小さな点に過ぎず、人口も少なく、知名度もあまり高くはありません。また「後開発途上国(最貧国)」として区分されるような国もいくつか存在しています。このように、オセアニア小島嶼地域は、地理的にも経済的にも、世界の中心に対する周縁的な存在として位置づけられてきた地域ということがあ

ります。しかし、彼らの実生活を見てみると、それは独自の社会制度や、文化、慣習、価値観などに基づく固有の生活システムによって支えられており、経済的な観点とはまた異なった意味において、社会の豊かさを感じさせるものでもありました。現在、農村開発においては経済発展のみならず、広く人々の生活の質の向上が求められるようになっていますが、こうした課題に取り組む上では、机上の理論を学ぶだけでなく、「フィールドからの学び」がますます大切になってくると考えています。

また、こうした姿勢は自身の研究だけでなく、教育の場においても非常に重要だと理解しています。国際農業開発学科には、途上国農村において国際貢献をしたいという意欲を持った学生が数多く入学してきます。こうした学生たちの背中を押すためにも、これまで私自身が、フィールドから得た経験や研究成果を常に教育の場に還元していくと同時に、学生と共に積極的にフィールドを歩くことで、農業・農村社会についての理解を深めていきたいと考えています。

教員としてはまだまだ力不足で、至らぬ点も多くありますが、研究・教育に全力で臨んでいく所存ですので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

農業開発経済学研究室 五野 日路子



2015年4月より国際農業開発学科農業開発経済学研究室に助手としてお世話になっております。2003年に国際農業開発学科に入学し、学部、修士課程と本学科で学ばせて頂きました。学部卒業後は協力隊員として、アフリカのマラウイへ、修士課程修了後は、公務員として働き、再び戻ってまいりました。まだまだ、学生のような存在であり、日々学ぶことが多いのですが、先生方にご指導頂きながら、学生の皆様と一緒に学びを深めていければと思っています。

前期の期間中は、学生の経済学の基礎ゼミに参加さ

せて頂いておりました。担当の学生が分かりやすくみんなにレクチャーするのですが、思いもよらぬ質問が他の学生よりあったり、捉え方が違っていたり、同じ本をもとに学習しているのですが、学生それぞれの意見があり、とても面白い経験をさせて頂きました。みんなの姿勢より、改めて大学は「勉強」だけではなく「学び」が出来る場所であるということを実感いたしました。

開発学科には、多くの経験を積んでこられた先生方や先輩方がいらっしゃいますし、自身も色々な経験をするチャンスがありますので、このような機会を自分の「学び」に変えていけるように手助けができればと思っています。

至らないことも多い私では御座いますが、学生に負けずに成長していけるように努めて参りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

開発学科統一本部 収穫祭及び体育祭報告

国際農業開発学科統一本部委員長 3年 菊池 和晃

前年度の収穫祭は11月1日から11月3日まで、体育祭は11月4日に行われました。国際農業開発学科からも多くの学生、教員が参加し、大変盛り上がりましたので、その結果について報告します。

まず、体育祭の方から報告させていただきますが、競技の部第2位、櫓の部第11位、御輿の部では経堂神輿パレードでは第1位、一般投票の部では第2位、応援の部第13位、総合第7位でした。一昨年より総合順位が下がってしまいましたが、神輿の部が好成績を残してくれました。

競技の部では、非常に多くの1年生、研究室・関連団体の皆様、部活動の皆様に協力していただき優勝することが出来ました。

応援は1カ月前から練習し、本番に臨みました。開発学科は前年度に引き続きトリを務め、恒例の他学科の乱入がありました。順位も大切ではありますが、全学科統一本部の役員全員が祭りのように楽しむことが出来ました。

続きまして、櫓や御輿にも関係のある収穫祭のことに



ついて報告させていただきます。僕たちは1カ月以上前から櫓や御輿の作成をしてきました。御輿は毎年恒例のゴリラをモチーフにして、ゴリラの毛皮を藁で見たてました。それに加えて、昨年度はゴリラ以外の装飾にも力を加えました。御輿担当の者が中心となって電動のこぎりなど危険な作業は2、3年生が中心となってやりましたが、藁を束ねる作業などは1年生も協力してくれました。年々大きな



2007年から国際農業開発学科を志望する中高生向けに学科を分かりやすく紹介するホームページ (<http://www.nodai.ac.jp/int/develop/index.html>) を公開しました。

海外実習や国内（学内・学外）実習、教員・学生の調査の様子、研究の様子について学部生・院生・教員からの投稿記事を随時掲載中。（<http://nodai.cc-town.net/modules/nmblog/categories.php>）。

国際協力を志すご子弟や教え子の進学先を考えていらっしゃる方、是非一度アクセスを。

どの規格が厳しくなってきましたが、立派なゴリラを作ってくれました。御輿は収穫祭期間中に展示するだけでなく、10月中旬に行う経堂パレードで御輿を担いで農大通りを通りました。多くの人に見ていただき収穫祭の宣伝をすることができました。

昨年の櫓はゴリラと和の要素をうまく融合させました。大きな波に椿の花を描きとても綺麗に、尚且つ迫力ある櫓となりました。

また、ステージ企画、後夜祭、経堂門装飾にも開発学科統一本部は携わっています。それぞれ、早いところでは夏休み前から準備が始まり、本番に向けて準備をしています。

今年度の収穫祭及び体育祭は僕たち3年生が中心となって運営していくことになります。まだまだ未熟者ではありますが、1,2,3年生一同が全力で取り組んでいきます。是非、足を運んでみてください。

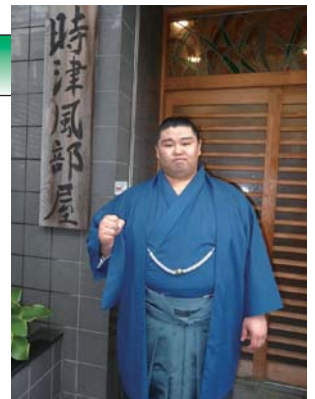
豊原秀和名誉教授がタマサート大学から名誉賞を受賞



平成27年6月27日、タイのタマサート大学の創立記念式典において豊原秀和名誉教授が名誉賞を受けました。長年にわたってタマサート大学の学生を受け入れてきた功績に対して送られました。(写真後列 左から2番目が豊原秀和名誉教授)

学生の活躍 十両昇進 正代直也

日本相撲協会は29日、愛知県体育館で大相撲秋場所(9月13日初日、東京・両国国技館)の番付編成会議を開き、4人の十両昇進を決めました。新十両の正代(しょうだい、23)=本名・正代直也、熊本県宇土市出身、本学国際農業開発学科卒業、時津風部屋=は、学生時代に3個のタイトルを獲得した実績を持ちます。2014年春場所初土俵から所要9場所での昇進となりました。9月場所の番付は西の十両十二枚目です。皆様の温かい声援をお願いいたします。



平成27年度日本熱帯農業学会奨励賞受賞 パチャキル バビル 助教

国際農業開発学科のパチャキル バビル 助教は、平成27年3月15日に開催された日本熱帯農業学会において、「ヤムイモ(Dioscorea spp.)の倍数性および形態形質の変異に関する研究」によって奨励賞を受賞した。受賞対象となった研究では、熱帯・亜熱帯地域の広範囲で栽培・利用されているヤムイモの一種ダイジョの種内変異と

その要因を解明した。また、ダイジョの染色体数を人為的に増やす効率的な手法を開発し、交雑育種が困難なダイジョの品種改良の新しい方法として提案した。現在は、本研究から得られた知見をもとにダイジョの品種改良を進めている。



農業生産法人(株)ライフオン

樋口 稔

(拓殖10期)

〒059-0272 北海道伊達市北黄金町 119-47
〒181-0004 東京都三鷹市新川 3-15-12
Tel: 0422-48-8976
Mobile: 090-3203-4950

東京農業大学125周年式典および校友会世界大会の開催

東京農業大学は2016年に創立125周年を迎えます。それを記念して、平成28年5月21日(土)に創立125周年記念式典と祝賀会が世田谷キャンパスで開催されます。

また、東京農業大学校友会世界大会が平成28年9月23日(金)に開催予定です。

青年海外協力隊員派遣50周年記念シンポジウム—東京農業大学と協力隊—を開催



東京農業大学は青年海外協力隊(以下協力隊)と伴に歩んできた。本学が協力隊に送り出した卒業生はこれまでに千名を超えている。実践教育をモットーに国内外の農業分野で活躍する人材を送り出してきた本学は1956年に農業拓殖学科を設置し、早くから開発途上国に目を向けていた。1965年に協力隊が発足すると協力隊審議会の農業分科会委員が本学から選出され、本学は協力隊事業を支援していくことになる。1965年7月には大学内に農業拓殖学科長を委員長とした協力隊応募者選考委員会が設置され、卒業生の派遣を後押しした。この年に選抜された7名は9月の協力隊第1次隊に応募し、全員採用され、12月に協力隊第1次隊第一陣2名がラオスへ出発した。50年の節目に当シンポジウムが開催され、協力隊OBからこれから協力隊をめざす学生達へメッセージが送られた。

第15回東京農大ホームカミングデー

<http://www.facebook.com/>

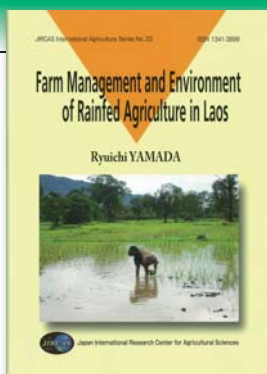


2015年6月20日(土)、「第15回東京農大ホームカミングデー」がおこなわれました。454名の農大卒業生のみなさまをお迎えし、午前中はキャンパス見学ツアーや教育者会議、午後は式典、講演会や学部別懇談会の一連のプログラムとともに、農大物産展や学生アトラクションなども併せてお楽しみいただきました。

式典では、親子三代以上にわたり農大をご卒業された5組の御家族様の表彰、125周年記念事業に対する高額寄付者表彰をおこないました。講演会は、森尻 雅樹氏(神奈川県職員 平塚土木事務所工務部 前道路都市課長)による「農大OB箱根駅伝3区の道路整備に携わる～行政マンによる「農の視点」でのまちづくり報告～」と題した講演がおこなわれました。

次回ホームカミングデーは、東京農業大学創立125周年記念式典と併せて、2016年5月21日に開催予定です。ふるってご参加ください。

著書紹介



『Farm Management and Environment of Rainfed Agriculture in Laos』

Ryuichi YAMADA

(農林統計協会 2014年 2,800円)

定する稲作の低収量構造を明らかにした。その上で、貧困からの脱却を展望するために、農業経営多角化の意義と課題を明らかにした。次いで、ラオスにおける最貧困地域である北部山岳地域の焼畑農業の構造と環境問題を明らかにした。なお、研究方法については、参加型手法を一部に取り入れつつ、基本的には農業経営調査とその分析を中心として農業経営レベルでの問題解明を行った。本書の各章は以下の通りである。

序章	課題と方法
第1章	ラオス農業の現状と動向
第2章	ラオス中部天水地域の農業構造と貧困
第3章	ラオス中部低地天水地域における稲作技術構造の現状と課題
第4章	ラオス低地天水地域における農業経営多角化の意義と課題
第5章	ラオス北部山岳地域の焼畑農業における貧困と環境
終章	要約と結論

ASEAN加盟国の最貧国層を形成する東南アジアの後発開発途上国であるラオスを対象として研究を行うことはミレニアム開発目標との関連で意義が大きいと捉えた上で、本書においては、ラオスの農業地域の大半を占める天水農業地域を対象として、農業経営研究を行った。

具体的には、本書では、まず、ラオス天水農業の中で、農業政策や農業研究の対象としてこれまであまり取り扱われることがなかった低地天水地域の自給的な農業構造を実証的に明らかにするとともに、貧困問題とそれを規

東南アジアに興味のある方々に本書が広く読まれるならば幸いである。

拓友会 第31号 2015年9月30日号

第55期 一般会計収支決算

(平成25年10月1日～平成26年9月30日)

一般会計			
	予算	決算	差異
収入の部			
1. 会費	1,760,000	1,350,000	▲ 410,000
卒業生	1,610,000	1,280,000	▲ 330,000
既卒者	150,000	70,000	▲ 80,000
2. 事業	480,000	446,000	▲ 34,000
ニュース広告	300,000	270,000	▲ 30,000
行事等収入	180,000	176,000	▲ 4,000
3. 寄付金等雑収入	50,000	53,000	3,000
4. 前年度繰越	387,273	387,273	0
合計	2,677,273	2,236,273	▲ 441,000
	予算	決算	差異
支出の部			
1. 事業支出	1,180,000	1,070,024	▲ 109,976
総会費	180,000	180,000	0
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	100,000	0
ニュース発行	400,000	357,210	▲ 42,790
拓友会賞	100,000	52,814	▲ 47,186
在校生への補助	200,000	180,000	▲ 20,000
2. 管理費	1,050,000	786,011	▲ 263,989
会議費	100,000	77,852	▲ 22,148
印刷費	100,000	46,364	▲ 53,636
交通費	50,000	38,000	▲ 12,000
通信費	500,000	450,444	▲ 49,556
消耗品費	100,000	64,151	▲ 35,849
雑給費	100,000	100,000	0
雑費	100,000	9,200	▲ 90,800
3. 特別会計積立金	200,000	200,000	0
4. 予備費	247,273	0	▲ 247,273
5. 次年度繰越金	0	180,238	180,238
合計	2,677,273	2,236,273	▲ 441,000

特別会計			
	予算	決算	差異
収入の部			
1. 前年度繰越	2,024,474	2,024,474	0
2. 一般会計より繰入	200,000	200,000	0
3. 雑収入	1,000	283	▲ 717
合計	2,225,474	2,224,757	▲ 717
	予算	決算	差異
支出の部			
1. 次年度繰越金	2,225,474	2,224,757	▲ 717
合計	2,225,474	2,224,757	▲ 717

第56期 一般会計収支予算

(平成26年10月1日～平成27年9月30日)

一般会計			
	第55期	第56期	差異
収入の部			
1. 会費	1,760,000	1,980,000	220,000
卒業生	1,610,000	1,880,000	270,000
既卒者	150,000	100,000	▲ 50,000
2. 事業	480,000	480,000	0
ニュース広告	300,000	300,000	0
行事等収入	180,000	180,000	0
3. 寄付金等雑収入	50,000	100,000	50,000
4. 前年度繰越	387,273	180,238	▲ 207,035
合計	2,677,273	2,740,238	62,965
	第55期	第56期	差異
支出の部			
1. 事業支出	1,180,000	1,180,000	0
総会費	180,000	180,000	0
新入会員歓迎会費	200,000	200,000	0
名簿整備	100,000	100,000	0
ニュース発行	400,000	400,000	0
拓友会賞	100,000	100,000	0
在校生への補助	200,000	200,000	0
2. 管理費	1,050,000	1,050,000	0
会議費	100,000	100,000	0
印刷費	100,000	100,000	0
交通費	50,000	50,000	0
通信費	500,000	500,000	0
消耗品費	100,000	100,000	0
雑給費	100,000	100,000	0
雑費	100,000	100,000	0
3. 特別会計積立金	200,000	200,000	0
4. 予備費	247,273	310,238	62,965
合計	2,677,273	2,740,238	62,965

特別会計			
	第55期	第56期	差異
収入の部			
1. 前年度繰越	2,024,474	2,224,757	200,283
2. 一般会計より繰入	200,000	200,000	0
3. 雑収入	1,000	500	▲ 500
合計	2,225,474	2,425,257	199,783
	第55期	第56期	差異
支出の部			
1. 次年度繰越金	2,225,474	2,425,257	199,783
合計	2,225,474	2,425,257	199,783

農業開発経済学研究室

農業開発経済学研究室 4年 村田 亮子

【経済研とは】

「農業開発経済学」は、国際経済学・農業経済学・開発経済学という3つの経済学を主要な基礎理論とした応用経済学の1分野です。私たち農業開発経済学研究室(経済研)では、『マクロにとらえて、ミクロに分析』をモットーに、農業開発経済学をベースとしつつ、各自の研究対象地域における歴史や風土・文化などの側面も考慮に入れた多面的側面からのアプローチを通して、農業開発、特に途上国農村の貧困削減について研究を行っています。

【中心的な研究課題】

- ・人口・食料問題および世界の食料安全保障
- ・農産物貿易と流通システム
- ・経済発展と農業の役割

【研究室の先生】

板垣 啓四郎 教授
高根 務 教授
中曽根 勝重 准教授
五野 日路子 助手

【研究室活動】

*ゼミの実施

ゼミとは、少人数グループ内での発表や議論を通じた学習活動で、研究室活動の柱となるものです。

- ①基礎ゼミ:応用理論を学ぶ前段階として、基礎的な経済学の習得を目的とするゼミです。基本的に1・2年生を中心に実施しています。このゼミでは教科書を設定し、各回毎に担当者を決め、発表者は担当箇所の説明を詳しく行います。問題意識をもつことを習慣づけ、批判的な目を養うことができるようなゼミになるよう工夫を凝らしています。
- ②課題ゼミ:収穫祭文化学術展の発表に向けたゼミです。3年生が中心となり、研究室の共同研究として

テーマを絞り込み、ゼミを通して個々人の問題意識や考える力を磨きつつ、室員が共通意識を持てるように努力しています。2015年度の課題ゼミのテーマは、「途上地域の農業の開発と発展を考える～小農の所得向上と貧困削減～」です。

*収穫祭への参加

4月に課題ゼミのテーマを決め、3年生が中心となって共同研究を行い、展示準備を進めます。3年生にとって初めての共同研究を行うにあたり、仲間同士、切磋琢磨しながら約半年かけて研究と展示物の作成に取り組みます。

*昼食会

毎週1回、先生・院生・学部生で集まり、和やかなランチタイムを過ごします。

*研修旅行

年に1回、研究室メンバー全員で学習目的の旅行を行います。このプログラムでは、毎年、テーマを設定し、旅先の農業・歴史・自然などを学ぶことを目的としています。また、旅行中には、収穫祭の研究発表に向けた中間発表ゼミも行われます。研修旅行は、先生や室員が交流を深める貴重な機会となっています。



おいしさは愛。

ハム工房ぐろーはるのハム&ソーセージは、《和豚もちぶた》を100%使用しひとつひとつ手間と時間をかけてつくられます。

ハム工房
ぐろーはる

〒377-0052 群馬県渋川市北橘町上箱田800
TEL 0279-52-3746 FAX 0279-52-3581
フリーダイヤル 0120-44-3746

グローバルピク农场株式会社

代表取締役 赤地 勝美 (拓殖5期)
URL <http://www.gpf.co.jp>